

第1章  
仏教美術とその周辺

---

## 1 ガンダーラ美術

北西インドのガンダーラ（現在のパキスタン）は、インド本土のマトゥラーと共に「仏像の発祥地」として知られてきました。ガンダーラ仏の成立について、以前はギリシア・ローマからの影響が強調されてきましたが、近年ではスワートにおける一群の古拙な作品を最初期のものとして、インド本土のマトゥラーと共通する基盤から始まったと見る説が有力になりつつあります。これは作品の様式的比較からも頷けます。こうした初期の作品の上に、新興の強大な帝国で、交易の相手としても重要だったローマからの影響が大規模に及んで、いわゆる「ガンダーラ美術」が形成されたのでしょう。この地には、アレクサンドロス以来のギリシアの伝統もあったので、同じくギリシアの流れを汲むローマからの影響は受け入れやすかったはずで、やがてガンダーラ美術は、インド本土のグプタ朝以降の美術の影響を受けて変容し、アフガニスタンや中央アジアに広がると共に、他方ではカシュミールを経て西チベットにも影響を与えました。以上は千年以上にわたる長い歴史ですが、本章最初の三節では、その「全期間」にわたる作品を展望します。



1-1-1 菩薩または供养者頭部 スワート 1c.  
緑泥片岩 高 19.8cm

「蒼古」というべき大型の頭部。ターバン冠飾を戴く王族の姿で、もしこれで礼拝に応える施無怖印を結んでいたら出家前の釈迦菩薩、供物を持っていれば供养者と考えられますが、これだけではいずれか不明です。やや平たい造りですが、力強い彫りで、大きく見開いた目が印象的。目には瞳も表現し、インパクトを増しています。こうした作風は、西方的なガンダーラ美術のイメージからかけ離れたものですが、初期の作品にはしばしば見られます。特に、マーシャルがタキシラのシルカップから発掘したストウッコの同種の頭部 (Marshall [2000] figs.37, 39, 後者は宮治 [1996] fig.II-14) と良く似ていて、同じく 1c. の作でしょう。インド本土のマトゥラーの菩薩像、さらにはパールフットの葉叉像に通じるインド独自の作風で、西方からの影響はほとんどありません。こうした作風はスワートのプトカラの作品 (次の 1-1-2 はその系統) にも見られ、同時代のものと見られます。こうしたものの上に、新興の帝国ローマからの影響が及んで、いわゆる「ガンダーラ美術」が成立したのでしょう。



(上左) 1-1-2 供養者立像 スワート 1c. 緑泥片岩 高 29.9cm  
これもターバン冠飾を戴く男性像ですが、右手に蓮華、左手に何かの供物を持っているので、供養者です。前と同じインド的な作風ですが、こちらは線的で、細かな表現が目立っています。こうした作風は、スワートのプトカラ初期の作品（例えば栗田 [2003] vol.II, pl.185）と共通し、この作品も同じく 1c. のものと考えられます。

(上右) 1-1-3 菩薩または供養者立像 スワート 2-3c. 緑泥片岩 高 29.3cm

前の2点と同種の像ですが、持物や印相が不明なので、菩薩とも供養者とも判断できません。時代はやや遅れて、既にスワートの作風が確立した時期の作品です。

(下左) 1-1-4 仏坐像 スワート 1-2c. 緑泥片岩 高 12.0cm

素朴な作品ですが、こうしたものもガンダーラには例があります（栗田 [2003] vol.II, pl.505, fig.28）。偏袒右肩で定印の姿は次の 1-1-5 に通じ、同じく比較的初期の作品のようです。

(次頁) 1-1-5 梵天勧請 ガンダーラ 1-2c. 緑泥片岩 幅 17.2cm

スワート初期の特徴的な図像です。こうしたもので、より初発的な作風のものもガンダーラ最初期(1c.)とされますが、これはやや型式化して、少し時代は遅れるかもしれません。



